

## ◆ 今週のコメント

- 腸管出血性大腸菌感染症の報告が1例あります。推定感染経路は、経口感染(生レバー)です。全国では、本年度で最も多い報告数(175例)となっています。
- インフルエンザ患者の集団感染(クラスター)の第36週の報告数は、京都市、全国ともに大幅に増加しています。新型インフルエンザによる全国の入院患者数は、9月2日～9月8日で108人で、そのうち基礎疾患を有する者等が45人、急性脳症・人工呼吸器使用患者数は5人です。

## ◆ 今週のトピックス: <インフルエンザ>

インフルエンザの定点当たり報告数は3.71(252例)で、先週(定点当たり報告数 2.22, 151例)の約1.7倍の値で、全国の定点当たり報告数(2.62)を上回る値となっています。詳細をトピックスに掲載しています。

## ◆ 発生状況

### 全数報告の感染症

- 二類:結核 2例(肺結核 1例, 肺外結核 1例, 無症状病原体保有者なし), (喀痰塗抹陽性 1例)  
【1月以降の累積報告数 270例(肺結核 172例, 肺外結核 67例, 無症状病原体保有者 31例), (喀痰塗抹陽性 83例)】
- 三類:腸管出血性大腸菌感染症 1例(O157 VT1VT2 1例)【1月以降の累積報告数 37例】

### インフルエンザ情報

- 集団感染(クラスター)報告件数の推移[暫定値]

	第33週	第34週	第35週	第36週
京都市	23	18	28	58
全国	662	794	1330	2318

- 全国の新型インフルエンザ(A/H1N1)による入院患者数

	第33週	第34週	第35週	第36週
患者数	86	105	87	108
うち、基礎疾患等を有する者	36	43	40	45

### 定点報告の主な感染症

(市内定点数 インフルエンザ定点68, 小児科定点41, 眼科定点10, 基幹定点1)

定点	感染症名	定点当たり報告数	報告数
インフルエンザ	インフルエンザ	3.71	252
小児科 (降順5位まで)	① 感染性胃腸炎	2.32	95
	② ヘルパンギーナ	0.71	29
	③ 手足口病	0.49	20
	④ 突発性発しん	0.32	13
	⑤ A群溶血性レンサ球菌咽頭炎	0.29	12
眼科	流行性角結膜炎	0.90	9

### 病原体情報

ありません。

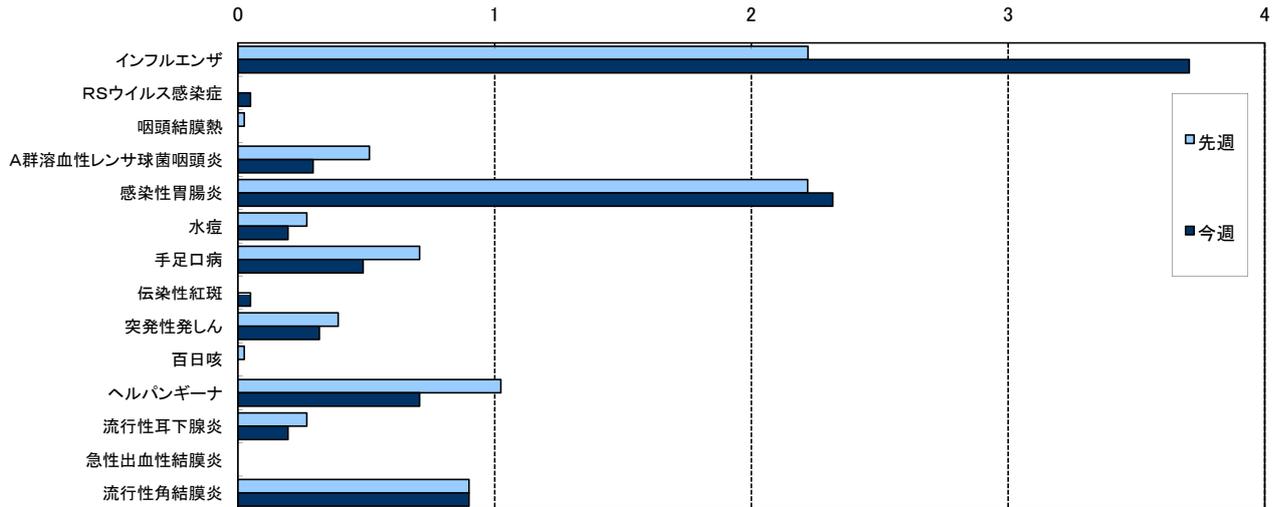
### 【次ページ以降の主な内容】

発生状況の概況グラフ / 今週のトピックス: <インフルエンザ>

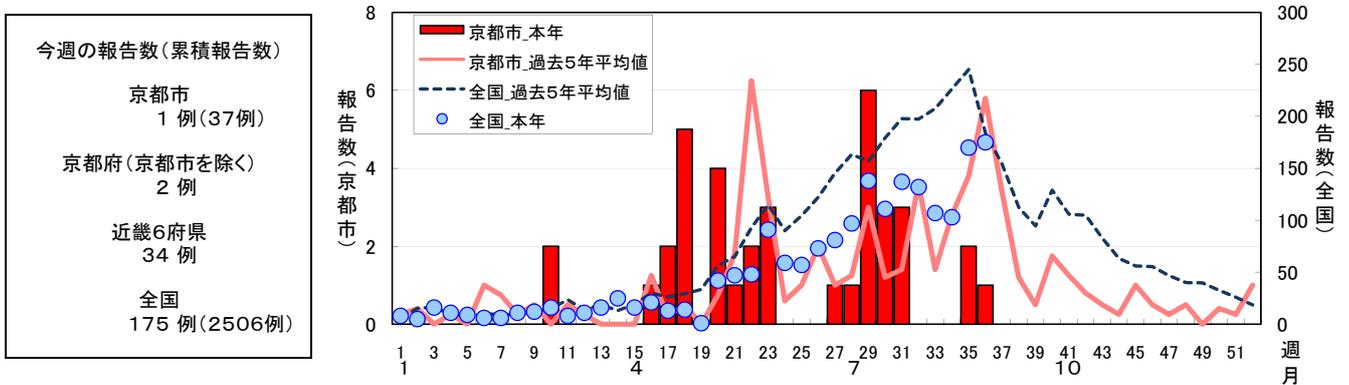
(注) 京都市のデータは、平成21年9月9日現在の報告数で、全国の還元データと若干異なる場合があります。  
また、本情報での患者数は、届出医療機関所在の保健所での集計で、患者の住所を示すものではありません。  
病原体情報は、病原体定点等から京都市衛生公害研究所へ搬入された検体から検出された病原体です。

# ◆ 発生状況の概況グラフ

## 1 今週(第36週)と先週(第35週)の定点当たり報告数の比較

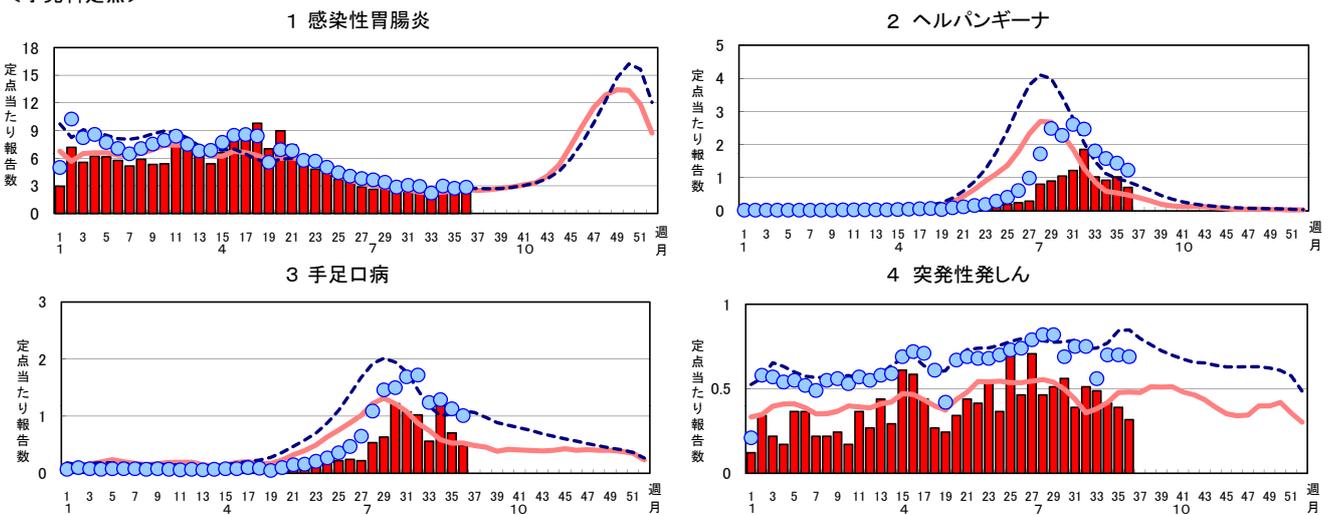


## 2 腸管出血性大腸菌感染症(三類感染症)の推移

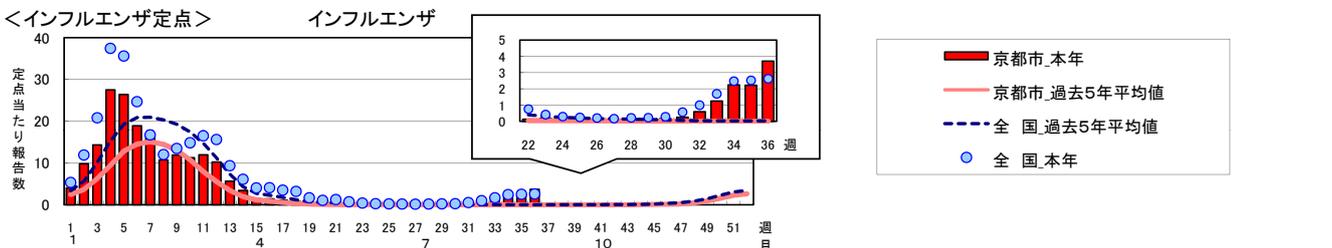


## 3 主な感染症の定点当たり報告数の推移

<小児科定点>



<インフルエンザ定点>



# 第36週(8月31日～9月6日)のトピックス: <インフルエンザ>

インフルエンザの定点当たり報告数は3.71(252例)で、先週(定点当たり報告数 2.22, 151例)の約1.7倍で、全国の定点当たり報告数(2.62)を上回っています。

年齢階級別構成割合をみると、先週に比べ、今週は特に10～14歳(38.9%)の割合が高くなっています。

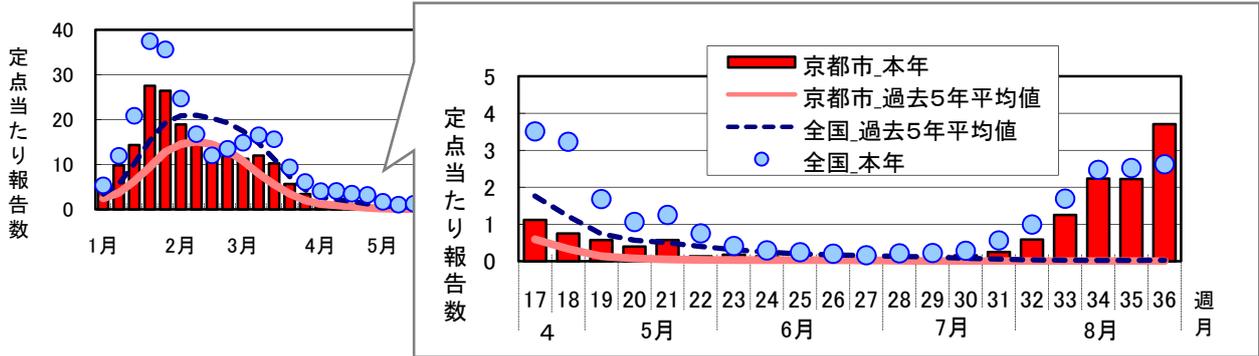
行政区別定点当たり報告数をみると、山科区を除くすべての区で増加しています。

都道府県別では、先週に比べ、沖縄県では減少していますが、近畿圏ではいずれも増加しています。

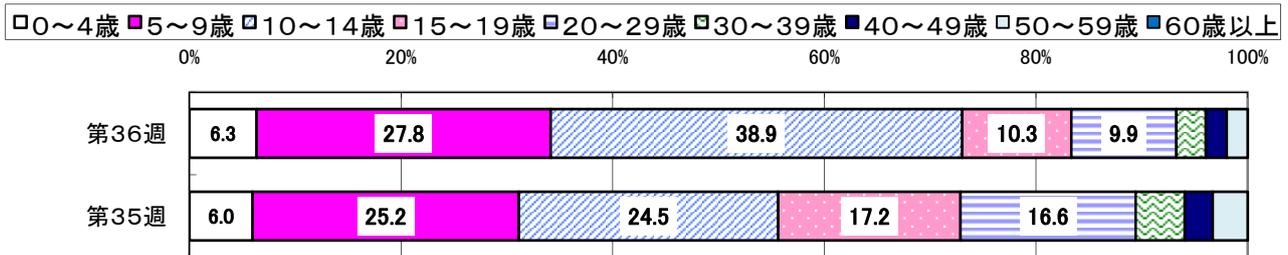
なお、第36週に、京都市衛生公害研究所で遺伝子検査によりインフルエンザA型陽性となった12例の内訳は、新型インフルエンザ(A/H1N1)[AH1pdm]が11例、H亜型判定不能例が1例です。

※第30週以降、インフルエンザの報告には、「季節性インフルエンザ」と「新型インフルエンザ(A/H1N1)」が含まれています。

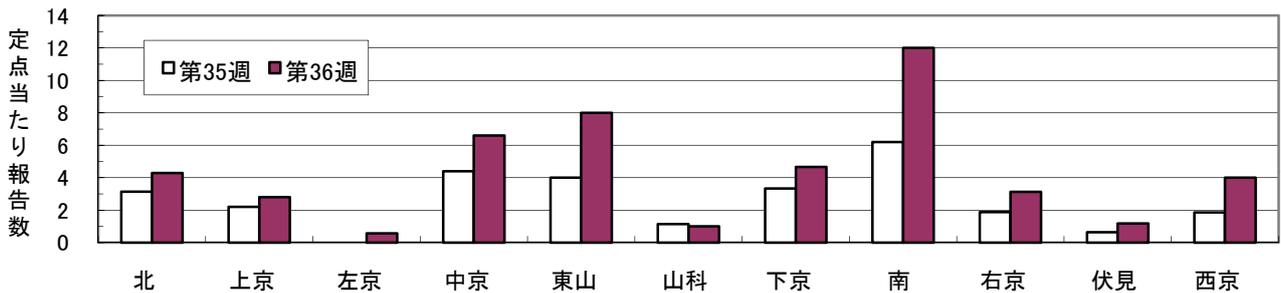
本市及び全国の定点当たり報告数 推移



年齢階級別構成割合



行政区別定点当たり報告数の推移



都道府県別定点当たり報告数の推移

